



Title	北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター 第48号
Citation	https://doi.org/10.24484/sitereports.140942
Issue Date	2024-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/93941
Type	bulletin
Note	特集 注口土器と片口土器
File Information	newsletter_48.pdf



[Instructions for use](#)

埋蔵文化財調査センター ニュースレター

特集 注口土器と片口土器

土器の口縁部や胴部に、管状の注ぎ口があるものを注口土器、U字状もしくはV字状の注ぎ口があるものを片口土器と呼びます。注口土器や片口土器は、食料の調理のための煮炊きを主目的とした深鉢形の土器とは、器の形態やサイズが明瞭に異なっています。液体の注ぎ口にみえる部分があるこれらの土器は、いったいどのような用途をもっていたのでしょうか。

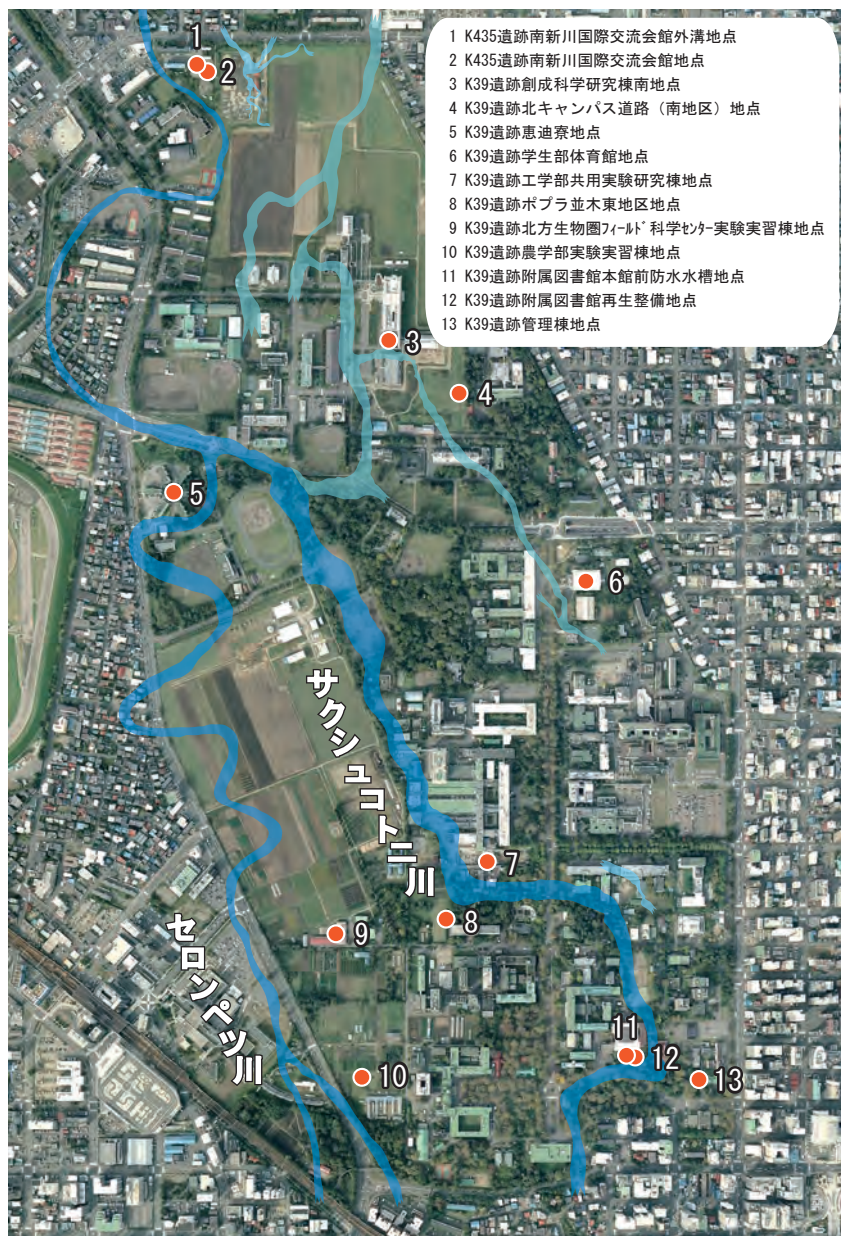
北海道では、縄文文化の後晩期や続縄文文化の後半期において、こうした注口土器や片口土器が多く作られていましたが、7世紀以降の擦文文化においても製作・使用が続いていたようです。北海道大学の構内でも、続縄文文化後半期から擦文文化にかけてのさまざまな遺跡からこうした注口土器や片口土器が出土しています。本特集ではこのような特殊な土器についてご紹介します。



▲ K435 遺跡南新川国際交流会館地点から出土した注口土器の出土状況

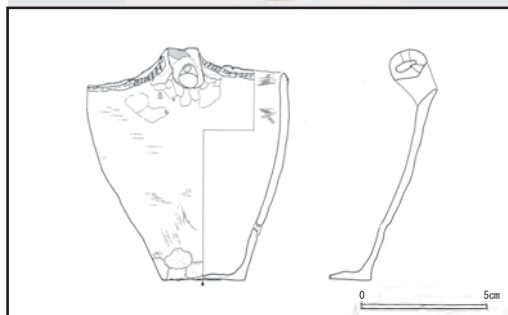
擦文文化後期の包含層から出土した。注口部の反対側の内外面にススが付着している。完形の状態で出土している。続縄文文化や擦文文化の注口土器や片口土器は、このように完形の状態で出土することが多く、ばらばらの破片の状態で出土することが多い深鉢形の土器とは、異なった取り扱われ方がなされていた可能性を示唆している。

注口土器・片口土器が出土した地点



▲ K39 遺跡学生部体育館地点から出土した注口土器

続縄文文化後半期の後北C2-D時期（3～4世紀頃）のもの。管状の注ぎ口が口縁部の一方所に設けられている。口縁部には波状の突起が一對認められる。この時期の深鉢形土器と同様に、器面にはさまざまな文様（縄文・刺突文・微隆起線文）が施されている。



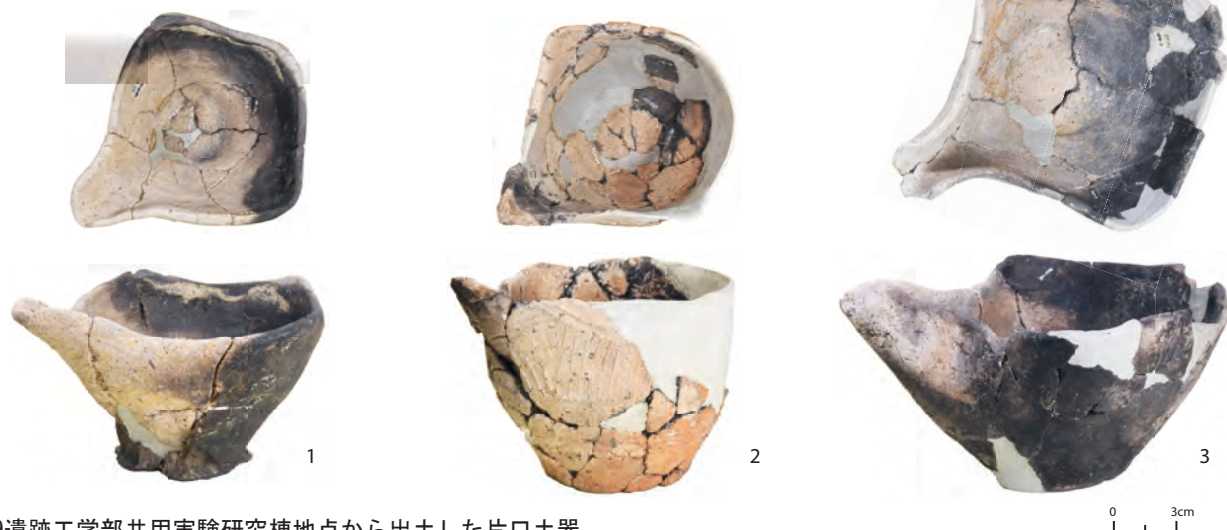
▲ K39 遺跡創成科学研究棟南地点から出土した注口土器（上：写真、下：実測図）

鉢形を呈する土器に注口部が設けられている。表裏を貫通している注ぎ口の上部には、直交方向に貫通した孔がみられる。

▼ 北海道大学構内において注口土器・片口土器が出土した地点

番号	地点名	層位・遺構	器種（個体数）	時期	報告書
1	K435遺跡南新川国際交流会館外溝地点	SWA3層	片口（1）	擦文後期	『北大構内の遺跡 XIX』
2	K435遺跡南新川国際交流会館地点	2c層	注口（2）	擦文後期	『北大構内の遺跡 XVI』
3	K39遺跡創成科学研究棟南地点	4層	注口（1）	擦文後期	『北大構内の遺跡 XIV』
4	K39遺跡北キャンパス道路（南地区）地点	LD3-1層	注口（1）	続縄文後半（後北C2-D期）	『北大構内の遺跡 XVI』
5	K39遺跡恵迪寮地点	LD6-1層	注口（1）	縄文晩期前葉	『北大構内の遺跡 XVI』
6	K39遺跡学生部体育館地点	VI層	注口（2）	続縄文後半（後北C2-D期）	『サクシュコトニ川遺跡1・2』
7	K39遺跡工学部共用実験研究棟地点	第IV層上面	注口（3）	続縄文後半（後北C2-D期）	『北大構内の遺跡 VI』
		西区8a層 HP01	片口（1）	時期不明	
		西区8b層 PIT35	片口（1）	続縄文後半（北大期）	
		PIT41	片口（1） 注口（1）	続縄文後半（北大期）	『K39遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』
		西区8b層	片口（5） 注口（2）	続縄文後半（北大期）	
		西区埋没河川（旧河道）SWA-C	片口（1） 注口（1）	続縄文後半（北大期）	
8	K39遺跡ポプラ並木東地区地点	遺構外	片口（3） 注口（1）	続縄文後半（北大期）	『北大構内の遺跡 V』
		12層	片口（1）	続縄文後半（北大期）	
		14層	片口（1）	続縄文後半（北大期）	
9	K39遺跡北方生物園フィールド・科学センター実験実習棟地点	16層 DB105	片口（1）	続縄文後半（北大期）	『北大構内の遺跡 XXIX』
		DB107	片口（1）	続縄文後半（北大期）	
		16層	片口（4） 注口（1）	続縄文後半（北大期）	
10	K39遺跡農学部実験実習棟地点	客土	注口（3）	続縄文後半（北大期）	
		2a層	注口（1）	続縄文後半	
		PIT11	注口（7）	続縄文後半（北大期）	『北大構内の遺跡 XXII』
			注口（1）	続縄文後半（北大期）	
11	K39遺跡附属図書館本館前防水水槽地点	5a層	注口（1）	続縄文後半（北大期）	『北大構内の遺跡 XV』
12	K39遺跡附属図書館本館再生整備地点	8層	注口（1）	続縄文後半	『北大構内の遺跡 XIX』
13	K39遺跡管理棟地点	1層	注口（1）	続縄文後半	
		2層	注口（1）	続縄文後半	『北大構内の遺跡 XIV』

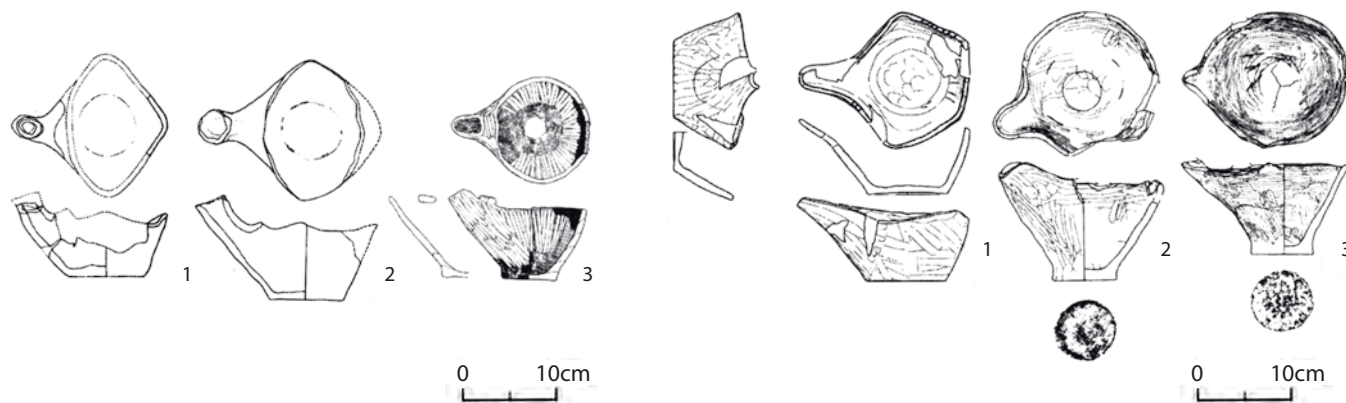
■ 注口土器や片口土器にみられるスス・炭化物の付着



▲ K39遺跡工学部共用実験研究棟地点から出土した片口土器

注口土器や片口土器の器面には、土器として製作された後に、おそらく使用の過程を反映すると思われる熱を受けた痕跡をとどめているものが多く認められます。工学部共用実験研究棟地点や南新川国際交流会館地点の出土土器では、内外の器面に黒いススや炭化物の付着などが認められます。その多くは、注ぎ口とその周辺ではなく、その反対側の内外面に認められるようです。この傾向は、他の遺跡でも認められます（恵庭市西島松5遺跡など）。付着した炭化物に対しては、現在、炭素・窒素同位体比分析などが可能ですので、将来において系統的に分析が実施されれば、注口土器や片口土器の使用状況を知る手がかりが得られるかもしれません。

■ 北大式期のなかでの注口土器・片口土器の形態変化



▲ 北大式期における注口土器（1・2は古く、3は新しい）

1・2: 江別市吉井の沢1遺跡、3: 恵庭市西島松5遺跡

▲ 北大式期における片口土器（1は古く、2・3は新しい）

1: 千歳市ユカンボシC15遺跡、2・3: 恵庭市ユカンボシE7遺跡

注口土器や片口土器として分類される土器も、時期に応じてその形態は変化しています。続縄文文化後半期のなかの北大式期（5～7世紀前葉頃）において、注口土器や片口土器は、その始まりから終わりまで、製作が続いていました。北大式期の当初においては、上から見ると不整の楕円形や四角形に近い形状のものが主に製作されていたのが、次第に円形のものに変化していき、また北大式期の当初の段階にはあった注口土器の口縁部における波状の突起も無くなっていきます（榊田朋広『擦文土器の研究』北海道出版企画センター）。北大式期の当初の段階における形態は、前代の後北C2-D式期における注口土器や片口土器の形態からのつながりで理解していくことができます。

■ 薬缶や急須の把手



▲ 横手



▲ 後手



▲ 上手

日本の家庭で湯を沸かすものといえば、電気ポットや電気ケトルもかなり普及してきていますが、火に掛ける薬缶（やかん）が代表的なものとして思い浮かばれるでしょう。また、お茶を淹れる際には急須（きゅうす）が一般的に用いられてきたと思います。薬缶や急須の共通点は、管状の注ぎ口が一端にあることです。

熱い湯を注ぐために薬缶や急須には一般的に把手が付いています。注ぎ口に対する把手の位置にもとづいて、把手は横手、後手、上手と分類されます（ただし、通常の急須と比較して上部の開口部が大きく、把手がない「宝瓶」（ほうひん）というタイプもあります）。今回の特集で取り上げている注口土器や片口土器に把手が付くことはなく、熱い内容物を頻繁に注ぐことが目的ではなかった可能性があるかもしれません。

■ 第23回遺跡トレイルウォークの開催

第23回遺跡トレイルウォークを令和6年10月12日（土）に開催しました。遺跡トレイルウォークとは、ハイキング形式で北海道大学構内の遺跡をめぐり、遺跡がどのような景観のなかに残されているのかについて知見を深めることを目的とした行事です。今回は「擦文文化の集落と河川での活動」というテーマで、大学正門から弓道場付近までのコースを辿りました。南門付近では当センターが実施していた擦文・続縄文文化の遺跡の発掘調査の状況についても見学しました。



▲ 遺跡トレイルウォークの様子

編集後記

本号では注ぎ口がある注口土器や片口土器に注目して特集を組みました。北海道では続縄文文化以降にみられるこうした注ぎ口のある土器は、本州の同時代の土器にはみられない個性が現れているように感じます。（高倉）

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター 第48号
令和6(2024)年12月27日発行

発行 : 北海道大学埋蔵文化財調査センター
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話 : 011-706-2671 FAX : 011-706-2094

e-mail : hokudaimaibun@gmail.com

URL : <http://maibun.facility.hokudai.ac.jp/>

印刷 : 柏楊印刷株式会社